

上毛電鉄友の会の活動経過と未来—市民・鉄道ファンから愛される鉄道をめざして—

市民団体「上毛電鉄友の会」 新保正夫・塩島翔

[http://www.jomorailway.com/supporters/
supporters@jomorailway.com](http://www.jomorailway.com/supporters/supporters@jomorailway.com)

はじめに

上毛電鉄友の会（以下、「当会」という。）は、上毛電気鉄道株式会社（以下、「上電」という。）の創立 84 年目となる平成 22 年（2010 年）に発足した。規約上の活動目的は「上電の運行継続に必要な諸事業に対し支援を行うことにより、上電の活性化に寄与すること」している。2009 年末に有志による約半年間の設立準備会を経て、翌年 5 月 27 日に行われた設立総会では、出席した約 30 名の議決により、大島登志彦氏（高崎経済大学教授）を代表に選出するほか、計 11 名の役員が決定した。大島代表は、交通地理学・交通史・産業考古学を専門とし、地方の公共交通の変遷と歴史的課題を研究テーマとしている。また、佐羽宏之副代表は、公共交通マイスターに任命されるなど、群馬県の地域公共交通政策に関わる。当会は、鉄道ファンのみならず、交通事業者の社員、地方公共団体の公共交通担当職員、地元高校の鉄道研究部OB会など、多岐にわたる分野から人材が集い、100 余名の会員によって構成されている。

活動方針としては、1. 上電の運行維持、活性化に必要と認める活動及び支援 2. 上電に対する各種ボランティアの募集及び支援 3. 上電が保有する車両の全般検査のための基金造成 4. その他運行継続、活性化に必要と認める活動及び支援 と定めている。この方針に基づき、現在、上電が主催している年 3 回のイベントと、ハイキングなどへの協力のほか、当会の独自企画として、スタンプラリー、ビール電車、会報の発行、駅の清掃、社史の編纂事業などを実施している。

本発表では、当会の発足から今日に至るまでの特徴的な活動を概観するとともに、未来へ向けた活動やその役割についても触れることとしたい。

1. 市民に関心をもってもらうための広報活動 —パートナーシップ・CM フェス—

当会の活動を知ってもらい、他の団体や地域・企業などとの活動と連携できるようにするため、2014 年 11 月 30 日、前橋市・前橋市市民活動支援センター主催の「地域・NPO・企業 パートナーシップのチャンス！」に参加し、上電クリーンボランティア清掃の参加者募集を中心に、新春イベントで使用するプラレールのレールの寄付依頼、上電パウンドの販売再開への協力を依頼した。この活動を契機として、粕川地区での駅清掃では、地域の方々の継続的な参加が始まった。



また、「まえばし CM フェス」に 1 分間動画を製作し、出品した。「赤城山がよく見える電車 上毛電気鉄道」というタイトルで、1 日を通して赤城山の麓を上電の車両がひたむきに走る姿をまとめた動画である。2015 年 2 月 21 日（土）に開催された CM フェス（会場：シネマ前橋）の公開コンテストの結果、94 作品の応募の中で 9 位入賞を果たした。これら活動が評価され、第 3 回（平成 28 年度）の表彰団体として前橋市市民活動表彰を受けている。

2. 鉄道遺産・文化財の評価への取り組み —イベントトークショー—

上電の魅力再発見をテーマに、鉄道遺産としての上電の価値を再考することを目的として、上電主催のイベントで「トークショー」を開催している。特に、新春イベントでは恒例企画となっており、2011 年の「上電の魅力と鉄道趣味」と「市民活動と地方鉄道再生策」を皮切りに、大島登志彦代表と花上嘉成東武博物館元名誉館長など、当会の会員が毎回登壇している。9 回目となる 2019 年は、「選奨土木遺産認定」をテーマとして取り上げた。



また、国鉄OBを招いて、ダイヤ作成にまつわる現場の生の話を伺うなど、史実はもとより、静かに失われつつある技術を、地域の財産・遺産としてどのように語り継いでいくか、という視点からも、イベントに来場者した聴衆者に対して考える機会を提供できるように工夫している。

3. 利用促進のための方策 —スタンプラリー—

当会では、上電の利用促進を目的とするスタンプラリーを、2010年から毎年実施している。鉄道スタンプラリーは、駅の改札の外にスタンプ台を設置することが多いが、マイカーで回ってしまうと鉄道の利用促進に繋がらない。このことから、参加者に実際に乗車してもらうため、700型全8編成の車内にスタンプを設置する手法で実施してきた。ラリーの期間中は、700型の運用表を当会の公式ウェブサイトを通じて情報公開した。また、マンネリ化を防ぐため、2011年以降は、上毛電鉄8編成のスタンプに加えて、次の他社に協力を依頼し、スタンプ押印箇所を増やしている。

2011年：前橋駅行のシャトルバス車内（日本中央バス）

2012年：上田電鉄（長野県）別所温泉駅。

2013年：流鉄（千葉県）流山駅

2014年：上信電鉄上州富岡駅・わたらせ渓谷鐵道水沼駅。

2015年：真岡鐵道（栃木県）真岡駅

・ひたちなか海浜鐵道（茨城県）那珂湊駅

2016年：北陸鐵道（石川県）北鉄金沢駅、内灘駅

2017年からは、新たにアルピコ交通（長野県）が同じ京



王井の頭線を出自とする車輛を運行しているという理由から加わった。これまで、隣県及び関東圏の鉄道会社であったが、金沢市、松本市と遠方の複数のパートナーを得たことから、コンプライト達成の難易度が高くなった。そのため2017年は、車内設置から北陸鐵道4駅、上毛電気鐵道4駅計8駅にスタンプを設置する形に変更した。2018年の参加事業者は2017年と同じで、各社2駅、計6駅のスタンプ設置とした。また、新しい試みとして2019年1月3日開催の新春イベント来場者に向け、一日限定のスタンプを準備した。当日は、当会が縁を繋いで上電をテーマとする楽曲を作っていたいただいた「スーパーベルズ」のライブがあり、ベルスグッズを特別賞として進呈した。

4. 未来への継続性の確保に向けて

当会では通例、秋にバスハイキングを実施しており、「廃線跡」を目的地として選定している。失われた鉄道の痕跡を目の当たりにすることで、上電の運行継続を願う機会とする。上電は、起終点駅となる「中央前橋駅」「西桐生駅」はもとより、JR線と接続する駅が存在しない。上電中央前橋駅とJR前橋駅は、約900m離れており、前橋市が委託する路線バスが中継している。両駅の間地点には、国道50号を含む複雑な5差路が存在し、円滑な交通流動を阻害してきた。上電の利便性向上と将来的な運行継続には、前橋駅への延伸が不可欠と考えており、この交差点の改良計画に機を合わせ、活発な議論が進むことを期待するとともに、当会の果たす役割を模索している。

おわりに

ひたちなか海浜鐵道の延伸、宇都宮のLRT開などの運行計画など、マイカーが席卷する北関東の中でも、公共交通機関のありかたが変化しようとする兆しがある。当会はこれからも上電を主軸として、群馬の公共交通ならび沿線地域の持続的な活性化に関与していきたい。

参考資料等

塩島翔「上毛電鉄友の会の活動について」『地域交通を考える』第8号 一般社団法人交通環境整備ネットワーク 2016（平成28）年11月25日 <http://ecotran.or.jp/article/16kaihou8/kaihou8.html>

「赤城山がよく見える電車 上毛電気鐵道」上電友の会（前橋 CM フェス第1回用作品）

<https://www.youtube.com/watch?v=NzPbTKF-u10>